

2019年度 国際日本文化研究センター共同研究会

<共同研究の目的>

国際日本文化研究センターが最も力を入れているのは、共同研究方式の日本文化研究です。日本文化を研究するためには、関係する個別専門分野ごとの成果が着実に積み重ねられなければなりません。と同時に、専門分野の枠組を越えて、研究者が相互に知見を高めあう場が必要になります。こうした共同研究の場は、総体として日本文化理解の促進に大きな役割を果たすものと考えます。このような観点から学際的な共同研究にウエイトを置いています。

また、日文研の共同研究では、日本と異なる知的伝統にたつ海外の研究者との交流をも重視します。異文化からの視点は研究に新しい展望と成果を与え、また研究のあり方に、よい意味での相対比をもたらします。さらに、国際化の時代を迎えた今日、日本文化研究もまた国際化をはかることで、時代の要請に応えることができるでしょう。

もちろん、日文研の共同研究は、単なる研究成果の交換にとどまるものではありません。専門分野及び知的伝統を異にする研究者たちが研究過程を共有しあうことによって生みだされる創造性、これこそが、日文研の共同研究がめざすところの眼目なのです。

(＊奨学生はオブザーバーでの参加となります)

「応永・永享期文化論―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざま
で―」について

<研究概要>

今、「室町文化」としてすぐに思い起こされるのは、足利義満が権勢をふるうなか、貴族文化・武家文化の融合、禅宗を始めとした大陸文化を受容したとされる所謂「北山文化」か、あるいは、義政治世から応仁の乱以後の時代、絵画・建築・庭園・文学・芸能・芸道など、日本文化の川上にあたるとも言うべき「東山文化」のどちらかではないだろうか。「北山文化」「東山文化」それぞれは、洛中の東西に所在する金閣・銀閣がアイコンとなって呼び起こすイメージによってますます確かなものとなり、それゆえに我々の「室町文化」観を膠着させてしまっている。

この共同研究は、これらの時代にはさまれた応永から永享にわたるおよそ半世紀、義持・義教期に生じた種々の文化的事象について、歴史学・文学（文献学）・美術史学・思想史学といった複眼的視座・方法から全方位的に捉えることによって、この時代を日本文化史・室町文化史に明確に位置づけようとするものである。

<研究代表者>

大橋 直義 国際日本文化研究センター客員准教授
呉座 勇一 国際日本文化研究センター助教

<本年度研究会開催予定>

5回

「大衆文化と文明開化：幕末から明治への激動期における大衆メディアの位置及び役割」について

<研究概要>

明治新政権の成立後、文明開化という「国策」が実施された。それが上からの改革であるという認識は、日本史研究において常識となっている。他方で、最近では「下から」の開化を取り扱う研究も増えてきた。明治初期の日常生活における風俗の変容に関するもの、また、錦絵新聞や小新聞の目覚ましい台頭を検討する研究も徐々に盛んになっている。大衆向きのマスメディアに関して、絵入新聞や仮名書新聞の大衆化機能を分析する研究も注目を集めている。

本研究プロジェクトは、これまでの研究を概観したうえで、下からの開化をより立体的に描くことを目的としている。また、新たな観点として、江戸文化からの継続性を見据えながら、開化の源流を問い直すこともいま一つの目標である。

<研究代表者>

アリスティア・スウェール 外国人研究員

<本年度研究会開催予定>

6回

「マス・メディアの中の芸術家像」について

<研究概要>

本研究では、第2次世界大戦後のメディアをめぐるインフラストラクチャーの変化を踏まえ、現代芸術（美術、音楽、文学、建築、思想など）を文化現象として再配置し、作家像、作品概念の変化を検証する。マス・メディア（放送文化と出版文化）を介してはかられる領域横断は、芸術家相互の新たなネットワークを生成することで、旧来の制度化された芸術諸分野を解体してきた。例えば、美術館、コンサートホール、文芸誌に固定化した作家や作品が、テレビ番組、総合雑誌、新聞に流通することで、情報であることを前景化してきた。こうした状況において、現代芸術は、抵抗文化としてのラディカルな戦略をいかに設計してきたのかを抽出する。

研究対象とする時代区分は、テレビがほぼ100%普及した1968年からインターネット元年と言われる1995年とする。オールド・メディア成熟期を分析対象とすることは、ニュー・メディア成熟期を迎える現在の批判理論の基礎となる。

<研究代表者>

松井 茂 国際日本文化研究センター客員准教授
坪井 秀人 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

5回

「差別から見た日本宗教史再考—社寺と王権に見られる聖と賤の論理」について

<研究概要>

本共同研究は宗教学における聖賤論を、神道学や日本仏教学の社寺史および日本歴史学の被差別部落論を通じた研究成果と突き合わせることで、宗教と公共性をめぐる議論として国際的な人文学研究に寄与することを目的とする。

さらに日本の人文学において依然として分離した傾向にある社寺史という神道学や仏教学の議論と、被差別部落論を射程に置いた日本史の聖賤論、そして宗教概念の内部にとどまりがちな日本宗教史の関係を結びつける学際的な研究ともなる。それはアレントからハーバマス、そしてアガンベンへと展開された公共性をめぐる議論への日本宗教史の観点からの読み替えの野心的な試みとなり、民主主義再考や人権概念の再検討といった国際的な規模で問われる人文科学や社会科学の今日的な課題にひとつの回答をもたらす試みとなる。

<研究代表者>

磯前 順一 国際日本文化研究センター教授
吉村 智博 国際日本文化研究センター客員准教授

<本年度研究会開催予定>

3回

「身体イメージの想像と展開—医療・美術・民間信仰の狭間で」について

<研究概要>

本研究では近世から近代、現代に至るまで、人々が身体イメージをどのように想像して図像化し、また展開させてきたのかを明らかにしていく。研究の独自性は、①人文社会学と自然科学との融合的研究である点、②図像、造形物、儀礼、芸能など幅広い素材を対象とする点、③身体各部位のイメージを分析した後、身体各部位の序列化、そして身体全体のイメージを解明し、段階的に議論を進めていく点、④ジェンダーの視点を取り入れ、新たな視座を提示する点にある。日本の医学に影響を与えた東洋医学、西洋医学のみならず、人類学の研究成果も取り入れ、民間医療における身体イメージも視野に入れる。最終的には、身体異常や奇形に対する偏見、進展を続ける生殖医療技術や生命倫理の議論に関連させて、現代社会を再検討するための素材を提供したい。

<研究代表者>

安井 眞奈美 国際日本文化研究センター教授
ローレンス・マルソー 海外共同研究員

<本年度研究会開催予定>

4回

「帝国のはざまを生きる—帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象」 について

<研究概要>

戦前東アジアにおいては、日本帝国を中核としながら膨大な人の流れが生みだされていた。本研究は、日本帝国と東アジアにおける人の流れ——移民・旅行——を対象としながら、とりわけ複合的なエスニシティと移動を経験した人々の「帝国のはざまを生きる」様相に焦点を合わせ、移民・人口移動の研究に新たな角度から光を当てていくことを目指している。

国際労働力移動、帝国—植民地、国際関係などマクロな力の持つ規定性を明らかにするとともに、マクロな力をかいくぐったりそこから抜け落ちたりする人の移動や人生にも着目しなければ、帝国日本と東アジアの人の移動の実像は描けないだろう。近年ようやく注目され始めた樺太アイヌの引揚者、濟州島の密航者、在満台湾人、在満朝鮮人、在満沖縄出身者人など、出自、エスニシティと生活空間とが複合的な様相を示した多様な人々を、「帝国の狭間を(に)生きる」というパースペクティブのもとで包括的に取りあげたい。

<研究代表者>

蘭 信三 国際日本文化研究センター客員教授
松田 利彦 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

「近代東アジアの風俗史」について

<研究概要>

日本人の暮らしは、西洋化されてきた。とりわけ、衣生活はその傾向が、いちじるしい。すまいでも、今日、畳は床からきえだしている。食事でも、舶来のメニューは、そうとうな数にのぼる。

ただ、食べ物に関しては、在来の食品もかなりある。西洋料理とのハイブリッドがなりたった品も、すくなくない。のみならず、中華料理も愛好されている。住宅づくりでは、在来造作の影がうすくなってきた。洋風の感化をうけた造形が、一般的になっている。衣服の場合もそうだが、中華文明の影響は、ほぼ見られない。がんこに残存する和風の伝統は、床の上で靴をぬぐ暮らしぐらいか。いっぽう、会日の和服は、礼装や遊び着の一部でしかありえない。

さて、東アジア諸地域も、19世紀以後は、西洋化の波をかぶっている。この研究会では、それぞれの地域における衣食住、生活風俗の推移をおいかける。その変容ぶりを、近代日本におけるそれと、比較検討していきたい。諸地域の西洋化にはどのような差違、あるいは特性があったのかを、うかびあがらせるつもりである。

<研究代表者>

井上 章一 国際日本文化研究センター教授
斎藤 光 共同研究員

<本年度研究会開催予定>

5回

「縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から」について

<研究概要>

日本の人口は 2008 年から急速な減少に転じた。高齢化率が高くなり、家計の可処分所得は 2015 年には 30 年前の水準に戻り、豊かさを感じていない国民が増えているといわれている。そうしたなかで、富裕と貧困、東京と地方、本土と沖縄、「日本人」とそれ以外、高齢者と若者、健常者と障害者、性的多数者と少数者、グローバル・エリートとローカルな民など、社会のさまざまな分断があらわれている。

そのような時代に、文化はどのようなものになるのだろうか。現代の日本で新たな思想や価値につながる何かが生えているのか。制度や社会的な圧力によって生まれなかったものがありはしないか。社会福祉や地域振興と文化創造は、ときに矛盾をはらみながら展開するが、はたしてそれらは個の「生」とどう関わっているのか。

個人の「生」の表現とそれに関する制度、政策、規制、資本主義の関係、参照点としての異文化圏、そして理論と批評の行方についてなどを検討することを通して、縮小社会における文化創造の現状認識を可視化したい。

<研究代表者>

山田 奨治 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4 回

「東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産」について

<研究概要>

戦後日本の社会運動は組合組織を拠点とした労働運動、地域を基盤とした住民運動、都市部の市民を中心に活動を行う市民運動、主に大学の学生組織によって行われた学生運動などによって展開された。運動の目標を基準に反戦平和運動（反基地闘争を含む）、環境保護（反公害）運動、女性解放運動、人権擁護運動などに分類することもできる。とはいえ主体や目標に限っても、運動は複層化し複雑に変化していく。

これらの運動の大半は国や自治体、企業などに対する反対運動、抵抗運動としての性格を持ち、〈闘争〉を呼称してきた。社会運動を闘争たらしめてきた要因の一つは、20世紀後半の世界を支配した冷戦体制にあった。本研究のプロジェクトはこの冷戦下における世界、中でも東アジアという枠組みの中で日本の社会運動を位置づけること、特に文学・美術・演劇・映画その他の文化生産の活動に焦点をあてて文化運動として再評価することを目的とするものである。

<研究代表者>

宇野田 尚哉 国際日本文化研究センター客員教授
坪井 秀人 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回

『日本型』教育文化を問い直す—新たな人間形成論をめざして』について

<研究概要>

近代の公教育制度が生まれてから約2世紀あまり、世界史的に見れば日本に公教育制度ができたのは比較的早い。近代学校が生まれる以前の江戸時代から、すでに一部の階層のためとはいえ教育制度があり、庶民の間でも組織的な教育もなされており、近代学校はそうした近代以前からの教育文化に支えられてきた。議会や軍隊と同様に学校は近代に普遍的な制度だが、その具体的なあり様は文化によって大きな違いがあり、能力観や学習観もそうした教育文化によって異なっている。しかし、経済のグローバリゼーションは、PISAテストに見られるように、欧米の教育文化に基づいた能力観・学習観を普遍的なものとして基準に据え、人材調達を容易にするように世界の教育を作り直そうとしている。本研究の目的は、欧米の教育文化の普遍主義を批判的に解読しつつ、日本の教育文化を特異な優れたものとするような特殊主義を解体し普遍性へと開く、教育文化モデル論の構築にある。

<研究代表者>

稲垣 恭子 国際日本文化研究センター客員教授
瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

<本年度研究会開催予定>

4回